

トゥルーデイ・リーバーマン

Trudy Lieberman

ジャーナリスト・ニューヨーク市立大学大学院教授

ロバート・バトラー博士はジャーナリズムを愛していた。彼は医師でありながら、学問の領域を軽々と越え、哲学者、思想家、そしてジャーナリストとして活躍した。

コロンビア大学時代、バトラー博士は学生新聞“The Spectator”の編集をしていたが、その頃に築いた編集仲間たちとの交友関係は生涯にわたって続いていた。

●

1975年に、バトラー博士は“Why Survive? Being Old in America”を執筆、翌年ピューリッツァー賞を受賞した。この他にも“Human Ageing”“The New Love and Sex after 60”などの著書があるが、これらは年を重ねることに関する米国人の考え方を大きく変革させた。

このように自分のメガフォンを使って人々をよりよい方向へ導いていくことこそが、まさにジャーナリストがすべき正しい仕事のあり方といえよう。

●

バトラー博士は、1960年代後半に「エイジズム」という言葉を創った。米国の新聞が「consumerism（消費者主義）」を打ち出していた時期である。

これにより記者たちは、米国市場がいかに消

費者である市民の期待を裏切っているかについて様々な形で知ることとなった。なかでも、ナーシング・ホームの利用を考える家族への裏切りは著しいものであることを知った。

それを明らかにしたのがバトラー博士である。消費者の擁護者であるラルフ・ネイダー氏と協力し、バトラー博士は米国のナーシング・ホームのひどい生活状況を公表し問題を表面化させた。ナーシング・ホームは恐ろしい場所であった。その多くは現在もお変わっていない。この先駆的な取り組みは、私を含め数多くのジャーナリストが引き継ぐこととなった。今日、多くの米国ジャーナリストが、劣悪なナーシング・ホームに注視の目を向け、地元で記事を書いている。私の場合は、もう20年にもなる。私たちジャーナリストは、こうした道を切り開いてくれたバトラー博士に心から感謝している。

●

バトラー博士は、連絡をした記者には誰でも真摯に取材に応じてくれた。アポイントをとるためにニューヨーク・タイムズやワシントンポストなどの大きな新聞社に所属する必要はなかった。「真実を深く掘り下げ、米国の高齢化のどの側面について書こうともその全体像を表すこと」そ



読売新聞の大津和夫記者(左)と筆者

れがバトラー博士がジャーナリストに求めたすべてであった。

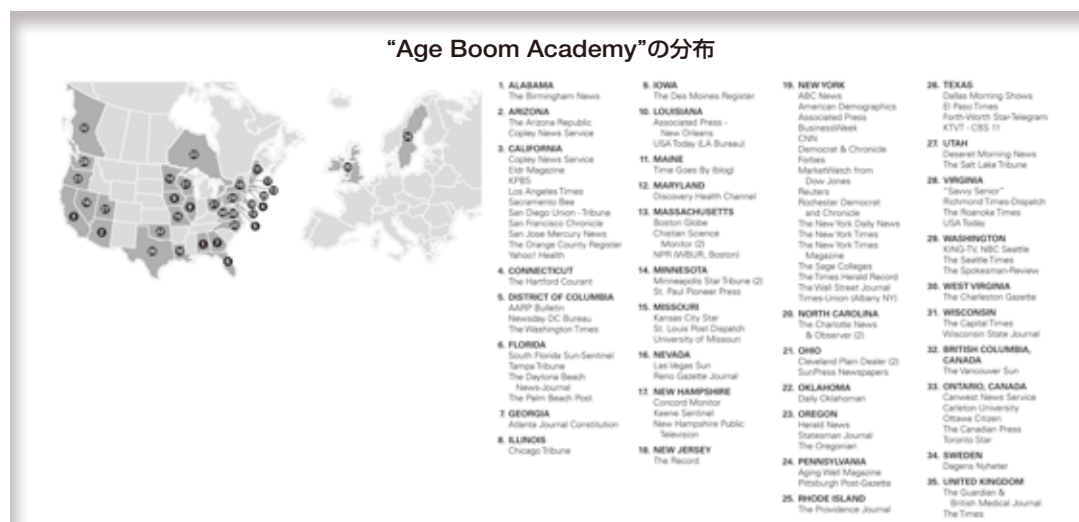
1995年にバトラー博士は、様々な分野のエイジング専門家を招集しILCのミッションを遂行するにふさわしい企画を求めた。ポール・クレイマン氏(American Society on Aging 刊行の“Aging Today” 当時編集長)の提案したジャーナリズム・プロジェクトの企画が通り、同年秋に、コロンビア大学において米国ジャーナリストを対象とする会議が開催された。私も会議に出席したが、高齢化に関するすばらしい情報の宝庫であった。このコロンビア会議での成功が2年後の日米メディアプロジェクトにつながっていくことになった。

1997年、バトラー博士はエイジングについて報道している米国と日本のジャーナリストを招き、2日間の会議を開催した。我々は、記事を比較し、両国の慎重を期するテーマについての報道を対比した。フルブライト奨学生であったときに学んだ通り、日本では終末期ケアの話題はタブーで

あった。我々は、文化的相違が報道への取り組み方にどのような特色を与えているかについて議論した。私たちが米国で行っていることを日本のジャーナリストと共有でき、とても感動した事を覚えている。残念ながら、結果的にこの会議はエイジングを報道しているジャーナリストの国際的集団にはつながらなかったが、ILC米国の新プロジェクト“Age Boom Academy”のきっかけとなった。

“Age Boom Academy”は2000年開始以来ずっと、米国ジャーナリストに高齢問題をどのように報道するかについての教育を行ってきた。

私は初回と2008年に講演を行った。バトラー博士と私は、私たちが達成してきたことについて長時間話をした。彼は「ロールモデル」として、私は「彼について知る解説者」として。これが、彼に会った最後であったが、私はこのとき彼のなかに老いの翳りを見た気がした。が、「いや、そうではない」と自分に言い聞かせた。彼は永遠に不滅だと思ったかったのだ。



(ILC Annual Report 2009)